

## 契丹語の複数接尾辞について

武内 康 則

京都大学白眉センター

**【要旨】** 本稿では、契丹語の名詞類に用いられる複数接尾辞について扱った。契丹語の複数接尾辞として *-ner*, *-d*, *-s*, *-d3*, *-n*, *-l* を認め、それらの使用される条件について考察を加えた。複数接尾辞の分布についてこれまでに十分検討されたことはなかったが、筆者の調査の結果、接尾辞の分布は接続する語の意味と深く関係していることが明らかとなった。さらに、語と接続する接尾辞の関係を有生性の階層の観点から捉えうることを示した。具体的には、*-ner* は階層の上位の人称代名詞及び親族名詞に、*-d* は *-ner* に比べて下位の生物名詞・無生物名詞に用いられ、*-s*, *-n* はさらに下位のより抽象性の高い無生物名詞・形容詞に用いられる。これらの接尾辞の選択が契丹語の品詞・名詞クラスと関係している可能性についても述べた\*。

**キーワード：** 契丹語, 契丹文字, モンゴル諸語, 複数, 名詞句階層

### 1. はじめに

本稿では、契丹語の名詞類<sup>1</sup>に用いられる複数をあらわす接尾辞について扱う。契丹語<sup>2</sup>は、中国東北部に遼(916-1125)を建国した「契丹」と呼ばれた民族の使用した言語である。契丹語の使用者はすでに絶え死語となっているが、契丹文字によって10-12世紀に記録された資料と、漢文資料に断片的に記録された語彙をもとにその研究が進められている。契丹語の全容は依然として明らかではないが、近年の契丹文字研究の進展により、その言語特徴も次第に明らかになりつつある。

契丹語の複数性に関しては、高(1988)による数詞と共起する名詞の分析により、

\* 本稿の論文審査にあたっては、2名の匿名の査読者より多くの有益な助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。本研究は、JSPS 科研費(課題番号: 15K16738)の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> 契丹語の名詞と形容詞の形態的・統語的差異については現段階では十分に明らかではない。意味的に形容詞と考えられる語の一部には、**𐰽𐰺** \*mo「大きい.M」と**𐰽𐰺** \*[?]<sup>1</sup>「大きい.F」のように文法的性による異なった形式がみられることが知られている(愛新覚羅 2004a: 180-181, 呉 2007: 134-136)。しかし、この特徴がすべての形容詞に当てはまるかどうか明らかではない。また**𐰽𐰺** \*mo「大きい.M」は「長子」の意味で用いられ、文の項となることもある。形容詞と考えられる語についても名詞と同様に「格」を表す接尾辞が接続する。契丹文字解読の現段階では名詞・形容詞の区別は容易ではなく、それらに配慮して議論することは事実上不可能であるため、本稿では名詞や形容詞を「名詞類」と呼びまとめて扱う。

<sup>2</sup> 筆者の想定する契丹語の子音・単母音の音素目録は以下のとおりである: p [p ~ p<sup>h</sup>], t [t ~ t<sup>h</sup>], tʃ [tʃ ~ tʃ<sup>h</sup>], x [k<sup>h</sup> ~ x], q [q<sup>x</sup> ~ ʃ], b [b ~ b<sup>h</sup>], d [d ~ d<sup>h</sup>], d3 [d3 ~ d3<sup>h</sup>], g [g ~ g<sup>h</sup>], ' [h ~ h<sup>h</sup>], s [s], (ts [ts]), ʃ [ʃ], (ʒ [ʒ ~ ʒ]), m [m], n [n], ɲ [ɲ], l [l], r [r ~ r], (v [v ~ w]), j [j], i [i], y [y], (i [i ~ i]), u [u], ɪ [ɪ], o [o], e [e ~ ə], o [o ~ ɔ], ɛ [ɛ ~ æ], ɑ [ɑ], ( ) で示したものは借用語にのみみられる音韻である。

初めて組織的に契丹語の名詞類に見られる複数接尾辞に考察が加えられた。また、愛新覚羅 (2004a) や呉 (2007) においても、契丹語における複数接尾辞について考察が加えられている。しかし、先行研究においては、どの文字要素が複数性をあらわすかについては、多くの場合見解が一致しているものの、研究者によって文字の推定音価が異なることや、契丹文字表記上での分析に留まりその背後の言語形式については十分な配慮が行われているとは言えないこと、接尾辞の分布・用法については十分に記述されていないことなどの問題がある。本稿では、これら先行研究の問題点をふまえ、改めて契丹語における複数接尾辞の同定を行い、各複数接尾辞の使い分けとその分布について明らかにすることを目的としている。

## 2. 契丹語と契丹文字

### 2.1. 契丹語の系統的親縁関係

契丹語の系統については定説がなく、長年にわたって議論されてきたが、近年では Ligeti (1970) や Janhunen (2003b) の述べるように、歴史上で「鮮卑」と呼ばれた民族が使用していた言語と同じ系統であり、モンゴル系の言語と関係が深いと考えられている。契丹語の主要な言語資料である契丹文字資料は 10–12 世紀に作成されており、年代を考えると契丹語は中期モンゴル語以前にも使用されていた言語ということになる。これまでの研究により契丹語には中期モンゴル語ではすでに失われた古い特徴を持つことが明らかとなっている<sup>3</sup>。しかし、その一方で契丹語は中期モンゴル語よりさらに改新的な特徴も持つことが判明している<sup>4</sup>。語彙に関しては、モンゴル諸語との同源語がみられる一方で、基本語彙においても他のモンゴル系の言語には見られない形式も多く存在する。したがって、契丹語はモンゴル諸語の直接の祖先と見なすことはできない。ちなみに、Janhunen (2003b) は、現代および中期モンゴル諸語の祖先としてのモンゴル祖語と、その姉妹言語であるが相当の違いのあった言語としての Para-Mongolic が並行して存在しており、Pre-Proto-Mongolic をそれらの共通の祖先としている。さらに Janhunen (2003b) は鮮卑系の拓跋や契丹の言語を Para-Mongolic 由来の言語とする<sup>5</sup>。

<sup>3</sup> 前モンゴル祖語 (Pre-Proto-Mongolic) の段階では \*p- であったと考えられている子音は、モンゴル祖語 (Proto-Mongolic) の段階では \*x- となり、中期モンゴル語では h- (x-) として現れる (Janhunen 2003a: 7)。この子音は契丹語では p- に対応する例を見出すことができモンゴル祖語より古い特徴を保持しているといえる。\*po「時」(MM hon「年」, cf. Ma. fon「時」), 𐰽𐰺𐰍 \*puluq「閏」(MM hūle'ü「多餘」, WM ilegüü「多い, 余った」, cf. Ma. fulu「多い, 余った」) など。中期モンゴル語の形式は栗林編 (2009) による。

<sup>4</sup> 一例をあげると、母音間に表記されるある種の (多くの場合 g で表記される) 子音 VCV が中期モンゴル語では発音されず、V'V' のような前後の母音の連続として表れる。一方、契丹語ではすでにその母音連続が解消されている例を見出すことができる。𐰽𐰺 \*eul「雲」(MM e'ülen「雲」, WM egülen「雲」), 契丹語 𐰽𐰺𐰍 \*bera:n「右」(MM bara'un「右」, WM baragun「右の, 西の」) など。

<sup>5</sup> 契丹と鮮卑との関係については『五代会要』卷二十九に「契丹、本は鮮卑の種なり」との記述が見られる。また、『魏書』「室韋伝」には「(室韋の) 言葉は庫莫奚・契丹・豆莫婁などの

## 2.2. 契丹文字

以下、本節では契丹文字の使用状況・契丹小字の構成・表語方法について概略を説明する。

### 2.2.1. 契丹文字の使用

遼（916–1125）の時代に定められた契丹文字には、契丹大字と契丹小字の2種類がある。神冊五年（920年）に遼の太祖・耶律阿保機によって契丹大字が公布され、その後太祖の弟である耶律迭剌によって契丹小字が考案されたとされる。契丹文字は遼を滅ぼした金（1115–1234）でも使用されつづけ、少なくとも明昌二年（1191年）に契丹文字の使用を禁止する法令が出されるまで使用された<sup>6</sup>。その後使用者は絶え、20世紀に契丹文字資料が確認されて以降、解読研究が進められてきた。

歴史書の記述からは、契丹文字は外交書簡や中国語文献の翻訳など、かなり広い範囲で使用されたとされるが、これまでに出土しているのは、墓誌などの石刻資料がほとんどである。現在、契丹大字の石刻資料は十数点、契丹小字の石刻資料は四十点ほど出土している。

契丹大字は契丹小字と比べ資料が少なく、研究も遅れていることから、本稿では契丹語の言語資料として契丹小字資料を用いる。

### 2.2.2. 契丹小字の構成

契丹小字は漢文と同様に縦書きで右から左に行を進める。契丹小字は構成法に特徴があり、ハンゲルのようにいくつかの要素を組み合わせて文字ブロックを構成する。これらの構成要素は研究者から「原字」と呼ばれている。文字ブロックは原字を左から右に2つずつ並べ、それを縦書きして漢字一字のような型にまとめて書かれる。3個、5個、あるいは7個の原字が組み合わされた時は、最後の原字は下段の中間に書かれる<sup>7</sup>。文字ブロックを単位として分かち書きされるが、分かち書きの単位は契丹語の固有語であれば語幹と拘束形態素から成る1語に相当し、中国語か

国々と同じである。」との記述がある（田村 訳注 1971:289）。さらに、森安（2007: 316–334）は、8世紀中葉のことを記録した当時のチベット人たちにとっての『北方誌』として編まれたパリ国立図書館所蔵のチベット語文書 P.t. 1283 について考察を加えている。P.t. 1283 中には契丹に関する記述もあり、「…その北方を見ると、契丹という者がいて、王は契丹の可汗であり、食物も宗教も吐谷渾と同じで…言語も吐谷渾とほとんど一致する…」とある（森安 2007: 320）。これら歴史資料に見られる記述から、契丹・拓跋以外にも庫莫奚（奚）・室韋・豆莫婁・吐谷渾などの民族が同じ系統の言語を使用していたと考えられる。

<sup>6</sup> 史書からは断片的な情報しか得ることができないが、遼の後に契丹人が東トルキスタンに建てた西遼（1132–1211）においても、契丹文字は使用され続けていた可能性もある。Зайцев (2011) により、契丹大字が記された冊子本がサンクト・ペテルブルクの東洋文献研究所に所蔵されていることが明らかとなった。Зайцев (2011) は、この冊子本がかつて西遼の領域であったキルギスで出土したものである可能性があると指摘している。

<sup>7</sup> 原字の組み合わせ様式は若干の例外があるが、主に次の7種類がある。数字は読む順を示している。

らの借用語では漢字1字（とそれに接続する拘束形態素）に相当すると考えられている（Wu & Janhunen 2010: 36）<sup>8</sup>。契丹小字資料には句読点は見られず、句や文の境界は明瞭ではない。

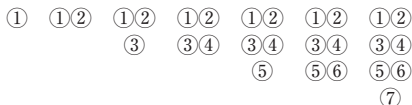
契丹小字が使用されていた当時の辞書などは伝わっていないため、原字の正確な総数ははっきりしないが、Wu & Janhunen (2010) では459字を認めている。Wu & Janhunen (2010: 47-48) は、これらのうち314字は意味あるいは音価が判明しており、145字は依然として不明であると言う。約70%の原字について何らかの手がかりが得られていることになるが、推定音価に関して研究者の意見が一致していないものも多く含まれており<sup>9</sup>、契丹小字資料の解読は依然として困難な部分が多い。

### 2.2.3. 契丹小字の表語方法

原字には、表意文字と表音の文字のどちらも含まれていると考えられている。数詞や方角を表す原字などは表意的文字の代表的な例と言えるが、大部分の原字は表音文字とみなしてよい。これまでに判明した表音文字の音価から見ると、1つの原字で2音節以上の語を示すことは少数の表意的文字にみられるのみであり<sup>10</sup>、基本的にV, VV, VC, (V)C, VCC, CV, CVCタイプの表音文字からなる。

契丹語の表音の特徴や表語システムに関する諸問題については、清格爾泰ほか（1985: 147-153）、清格爾泰（1997）、愛新覺羅（2004a: 23-25）、Kane（2009: 28-33）、大竹（2013）などの議論がある。契丹小字の表音方法において特に注意せねばならないのは、母音の加音あるいは削除と呼ばれる現象である。たとえば、**𐰺**は**𐰺力乃** \*sam「三」< Ch. EM<sup>11</sup> sam、**𐰺水** \*suŋ「宋」< Ch. EM suŋの例にみられるように、語頭s-の表記に用いられる。その一方で、漢字で「義信」（Ch. EM i siən）と音写される人名は**𐰺𐰺**と表記され、**𐰺**がisの表記に用いられた例もみられる。したがって、**𐰺**はisおよびsのどちらも表記することがわかる。このようなCあるいはVCのどちらも表記することのできる原字が一部存在していることが判明していることから、文字表記からその音形式を復元する際には母音の有無について配慮せねばならない場合がある。

1つの原字が表示する子音と母音の連続は、表記する契丹語の音節構造と一致す



<sup>8</sup> 本稿での契丹小字の転写においては、便宜上文字ブロックを直線的に配列する。原字を1文字として配列し、1つの文字ブロックを単位として分かち書きする。

<sup>9</sup> 原字の推定音価に関する近年のまとまった議論としては、Kane（2009）、清格爾泰（2010）、吉本（2012）などがある。紙幅の都合上、関連するすべての原字について筆者の音価推定のプロセスを示すことはできないため、本稿では特に本稿での議論上重要となる原字の音価についてのみ議論することとしたい。

<sup>10</sup> **𐰺** \*qoɖoq「福」、**𐰺** \*noɾaŋ「黄色.F」などの例がある。

<sup>11</sup> 中国語の近世音の推定音価は李・周編撰（1999）に基づく。

るわけではない。(1) のように VC や CVC を表示する原字にさらに母音 V を表示する原字が続き、VC-V あるいは CVC-V と原字が配列されることで、V.CV や CV.CV タイプの音節を表記する場合がある。

- (1) a. 𐰺𐰠 <tɛl-a> \*tɛ.la 「帖刺(人名)」(Ch. EM thiɛ la)  
 b. 𐰺𐰡 <tɛl-i> \*tɛ.li 「鐵離(人名)」(Ch. EM thiɛ li)  
 c. 𐰺𐰢 <ɛm-a> \*ɛ.ma 「(十二支の)未」  
 d. 𐰺𐰣- <on-a> \*o.na- 「落ちる」の語幹

さらに、前述したような VC と C のどちらも表示できる原字が用いられる場合には、(2) のように (V)C-VC-VC の表音タイプの原字の配列によって CV.CVC を表記することになる。

- (2) a. 𐰺𐰤𐰥 <en-am-ur> \*na.mur 「秋」  
 b. 𐰺𐰦𐰧 <edʒ-ig-in> \*dʒi.gin 「左」

また、契丹小字による表音の特徴として、(3) のように同じ音価の母音が2文字にわたって重ねて書かれることがある。この性質は、中国語音の表記に限らず契丹語の表記においても一般的にみられる特徴である。

- (3) a. 𐰺𐰨𐰩 <l-a-an> \*lan 「蘭」< Ch. EM lan  
 b. 𐰺𐰪𐰫 <l-au-u> \*lau 「洛」< Ch. EM lau

### 2.3. 契丹語における複数性

契丹語の名詞類に関わる文法範疇として、「性」、「数」、「格」がある。このうち、「数」に関しては単数と複数の厳密な区別があり、複数接尾辞が接続していない名詞は単数をあらわし、複数の指示対象には名詞類には複数を表す接尾辞が接続する。複数接尾辞は契丹語にみられる派生接尾辞の1種とみなすことができ、「数」および「格」を表す接尾辞が同時に1つの語幹に付加される場合には、複数-格の順で接続する。現代モンゴル語では数詞によって修飾されている名詞には複数接尾辞が用いられない (Kullmann & Tserenpil 2008: 76)。しかし、契丹語では数詞によって修飾されている名詞においても(4)の例のように複数接尾辞は用いられる。

- (4) a. 𐰺𐰬𐰭𐰮 <[?] kɛ-ɛn-id> \* [?] kɛn-i-d  
 十.M<sup>12</sup> 𐰺𐰮-PL  
 「十𐰺」  
 b. 𐰺𐰯𐰰𐰱 <nɛm [?]-ig-id> \*nɛm [?] ig-i-d  
 八.F 𐰺𐰱-PL  
 「八字」

<sup>12</sup> 契丹語の数詞・序数詞には文法的性による男性形と女性形の区別が認められる (愛新覚羅 2004a: 179-187, 呉 2007: 127-175)。

また、(5)のように名詞類修飾要素と名詞類との数の一致も見られる。

- (5) a. 百令 舟列出 <me-ed ib-aq-aŋ>  
           \*me-d   baq-a-ŋ  
           女-PL   子-E-PL  
           「娘(複数)」
- b. 口令 年令 年 <te-ed ai-is-er>  
           \*te-d    ai-s-er  
           その-PL 年-PL-INST  
           「それらの年(複数)に」

### 3. 契丹語における複数接尾辞

契丹語の複数接尾辞に関する近年の研究として、愛新覚羅 (2004a: 123–146)、呉 (2007: 82–125)、Kane (2009: 138–143) がある。いずれも複数接尾辞の表記にどのような原字が用いられるかを整理し、その音価をもとに複数接尾辞の形式について述べている。先行研究では、複数接尾辞の表記にどのような原字が用いられるかと言う点については、多くの場合見解が一致している。しかし、原字の推定音価は研究者によって異なるため、文字表記の背後にある接尾辞の音形式については、結論が異なっている部分もある<sup>13</sup>。近年の研究の進展より正確な音価推定が可能となった原字も複数存在するため、音形式の再構に関しても再検討をする必要がある。また、先行研究では表記に用いられた文字を単位に分析を進めており、必ずしも文字表記から再構される契丹語の音形式に従い記述しているとは言えないため、本稿では文字表記とともに再構される語形も示す。

筆者は、名詞類の複数をあらわす接尾辞として -ŋɛr, -d, -s, -dʒ, -ŋ, -l を認める。先行研究と異なっている点として特に取り上げなければならないのは、先行研究で指摘されている複数接尾辞としての -r を認めない点と、新たに複数接尾辞として -ŋ を認める点である。

先行研究において複数接尾辞としての -r が認められてきたのは、複数接尾辞の表記に用いられる 𐰽 に一般的に r を含む音価が与えられてきたからである<sup>14</sup>。この音価は広く受け入れられているといえるが、𐰽 の音価推定は漢字と契丹文字との対音関係など強い根拠によってなされたものではなく、(6) に示した契丹語の数詞や方角を表す語のモンゴル語との比較によってなされたものである。

<sup>13</sup> 愛新覚羅 (2004a) は、複数接尾辞として -t, -l, -dʒi ~ -dʒ, -tʃ, -r, -s, -sur, -nur, -nin を認めている。一方呉 (2007) は、中心的な接辞として -tʰ, -s, -tʃ, -r を認め、そのほかに -li, -nor ~ -nɔl, -nin, -nɔd を認めている。

<sup>14</sup> 愛新覚羅 (2004a: 18) は ru/-r, 呉 (2007: 178) は ru, 清格爾泰 (2010: 505) は ru の音価を与えている。Kane (2009: 62–63) による転写では <ur> である。

(6)

𐰇𐰏𐰣 <edʒ-[ʔ]-er> *dʒ[ʔ]er 「二番目.M」	WM jirin 「二」
𐰇𐰏𐰤 <aq-[ʔ]-er> *q[ʔ]er 「三番目.M」	WM gurban 「三」
𐰇𐰏𐰥 <ed-[ʔ]-er> *d[ʔ]er 「四番目.M」	WM dörben 「四」
𐰇𐰏𐰦 <[ʔ] <sup>15</sup> -[ʔ]> *[ʔ] 「東」	WM doruna 「東」

これらの語の比較から、𐰇𐰏 - jir, 𐰇𐰏𐰤 - gur, 𐰇𐰏𐰥 - dör, 𐰇𐰏𐰦 - dor (あるいは doru) の対応が見出され𐰇𐰏には ur あるいは ru の音価が与えられた<sup>16</sup>。しかし、民族名である唐古(党項)は、𐰇𐰏𐰥𐰣 <ed-aŋ-[ʔ]> \*daŋ[ʔ] (MM tangʷüt) と表記されていることや、契丹語の「三番目.M」には𐰇𐰏𐰤𐰣 <aq-od-er> \*qoder のような異写形式も存在していることを考慮すると、𐰇𐰏はむしろ <ud> を表示していると考えるのが合理的であろう<sup>17</sup>。したがって、本稿ではこの原字は <ud> を表示しており、複数接尾辞 -d の表記に用いられたものとみなす。以上より、独立した複数接尾辞としての -r を認めない。

-ŋ に関しては、(7) のように修飾語・被修飾語間の数の一致と考えられる例を複数認めることができるのを根拠としている。

<sup>15</sup> 𐰇𐰏の音価推定も契丹語とモンゴル語の「東」を意味する形式の比較によってなされ do などの推定音価が与えられてきた。𐰇𐰏と近似した字形の𐰇𐰏に対して愛新覺羅・吉本(2011: 128)は umu の音価を与えている。Wu & Janhunen (2010: 63–64, 80)の指摘するようにこれらの原字は区別が困難であることから、筆者は𐰇𐰏は𐰇𐰏の異体字であると考えており <um> を表示していると考ええる。

<sup>16</sup> 𐰇𐰏の音価推定の詳細については清格爾泰(2010)を参照されたい。ちなみに、この音価推定に当たっては「東」を意味する語の形式が根拠とされたわけであるが、契丹語の方角を表す語のうち少なくとも一部はモンゴル諸語とは近似していないことが明らかとなっている。契丹語の「南」は𐰇𐰏 <der>\*der であり、WM emüne 「南」とは異なる。契丹語はモンゴル諸語と関係が深いとされながらも相当な違いがあったと考えられるため、文字の音価をモンゴル語の形式と比較のみによって進めるのは合理的とは言えない。また、𐰇𐰏と似た字形である𐰇𐰏が <ir> を表示することも𐰇𐰏の音価推定に影響を与えた可能性がある。しかし、原字の表示する音価と原字の字形との間には関連性を見出すことができないことも多い。

<sup>17</sup> この音価推定は、契丹語の数詞および序数詞の解釈にも影響をもたらすことになる。「三番目」の表記には、𐰇𐰏𐰤𐰣 <aq-[ʔ]-er> (男性形)、𐰇𐰏𐰤𐰣𐰥 <aq-[ʔ]-eŋ> (女性形)があるが、従来は𐰇𐰏を ur と読むことによって、序数詞の語構成を基数「三」\*qur に序数をあらわす接辞である -er (男性形)あるいは -eŋ (女性形)が接続したものであると解釈されてきた。しかし、筆者の推定音に従うと、序数の形式はそれぞれ、𐰇𐰏𐰤𐰣 \*qoder, 𐰇𐰏𐰤𐰣𐰥 \*qodeŋ となり、契丹語の「三」の語根 \*qu に序数をあらわす接辞である der (男性形)あるいは deŋ (女性形)が接続したものと解釈することになる。モンゴル祖語の段階では、「三」の語根は \*gu- と再建され、序数は語根に接辞 -taxar が付加された \*gu-taxar 「三番目」であったと考えられている (Poppe 1955: 242–249, Janhunen 2003a: 16–17)。また、モンゴル文語や中期モンゴル語においては、WM gutugar, MM qu-ta'ar ~ qu-tu'ar 「三番目」となる (Poppe 1955: 242–245, Rybatzki 2003: 70–71)。筆者の解釈によってモンゴル文語や中期モンゴル語とより近似した語形・語構成を契丹語に見出すことができることになる。

(7)

爰化伏 半空 <u-ud-ŋ ai-id>	*u:d-i-ŋ ai-d	←	爰化 半 <u-ud aj>	*u:d ai
	上-E-ŋ 父-PL			上 父
	「先祖(複数)」			「先祖」
百令 丹列出 <me-ed ib-aq-aŋ>	*me-d baq-a-ŋ	←	百丹力 <me ib-aq>	*me baq
	女-PL 子-E-ŋ			女子
	「娘(複数)」			「娘」

愛新覚羅 (2004a: 128-129) や Kane (2009: 135-136) は、爰化伏 半空の例では伏は属格をあらわす接尾辞を表記したものであるとみなしている。しかし、本稿では-ŋも複数をあらわす接尾辞の1つとみなす。

次に、それぞれの接尾辞とその契丹小字での表記法、母音の挿入規則についてまとめる。

### 3.1. -d

-dは多くの語に対して用いられ、最も一般的な接尾辞といえる。亦 <ad>, 而 <od>, 空 <id>, 令 <ed>, 化 <ud> などの原字によって表記される。愛新覚羅 (2004a: 138-145), 呉 (2007: 96-107), Kane (2009: 141-142) などの先行研究においてもこれらの原字は複数を表す接辞の表記に用いられていると考えられている<sup>18</sup>。

接尾辞-dが直接、名詞語幹に接続する。語幹末が喉音 (ŋ, g, q, ' ) 以外の子音の場合には母音 i が挿入され、-dが接続する。以下 (8) に例を示す。

(8)

亦及 而 <[ʔ]-o-od> * [ʔ]o-d	←	亦及 <[ʔ]-o> * [ʔ]o	「婿」
百令 <me-ed> *me-d	←	百 <me> *me	「母・女」
米爰化 <ord-u-ud> *ordŋ-d	←	米爰 <ord-u> *ordŋ	「行宮」
又力 空 <ʃ-a-al-id> *ʃal-i-d	←	又力 空 <ʃ-a-al> *ʃal	「郎君」
乃 空 <mur-id> *mur-i-d	←	乃 <mur> *mur	「河」

語幹末が喉音子音 ŋ, g, q, ' の場合には、(9) に示すようにその子音に先行する母音が接尾辞-dの前に挿入される<sup>19</sup>。

<sup>18</sup> 愛新覚羅 (2004a) は、亦 at/-t, 而 ta/-t, 空 d/t, 令 d/t, 化 ru/-r とし、複数を表す接辞-tおよび-rの表記に用いられていると言う。呉 (2007) は、亦 tu, 而 tʰa, 空 tʰu, 令 tu, 化 ru とする。Kane (2009) による転写では、亦 <ad>, 而 <od>, 空 <d>, 令 <t>, 化 <ur> となる。

<sup>19</sup> ちなみに、格を表す接尾辞においても以下のように同様の母音の挿入を見ることができる。

引力 欠 尔 <d3a-ir-oq-on> *d3airoq-o-n	←	引力 欠 <d3a-ir-oq> *d3airoq	「宰相」
		宰相 -E-GEN	
凡 丙 水 凡 <eg-iu-ŋj-und> *giuŋ-u-nd	←	凡 丙 水 <eg-iu-ŋj> *giuŋ	「宮」 <Ch.
		宮 -E-LOC	



(9)

羽 儿 欠 币 <dʒa-ir-oq-od> \*dʒairoq-o-d ← 羽 儿 欠 <dʒa-ir-oq> \*dʒairoq 「宰相」  
 捺 化 <qudüq-ud> \*qudüq-u-d ← 捺 <qudüq> \*qudüq 「福」  
 儿 丙 太 化 <lg-iu-uŋ-ud> \*giuŋ-u-d ← 儿 丙 太 <lg-iu-uŋ> \*giuŋ 「宮」 <Ch EM kiun>  
 杰 币 <oŋ-od> \*oŋ-o-d ← 杰 <oŋ> \*oŋ 「王」 <Ch. EM uaŋ>

また、(10) で示すように子音 n で終わる一部の語では、語幹末の子音は複数接辞 -d と交替する。

(10)

儿 儿 朵 <ir-Ig-Id> \*irgI-d ← 儿 儿 朶 <ir-Ig-In> \*irgIn 「夷离董(称号)」  
 王 本 朵 <ti-i'-Id> \*ti'i'-d ← 王 本 朶 <ti-i'-in> \*ti'in 「惕隠(称号)」  
 cf. 並 考 朵 <xɛ-ɛn-Id> \*xɛn-I-d ← 並 考 <xɛ-ɛn> \*xɛn 「県」 <Ch. EM hiɛn>

モンゴル祖語や中期モンゴル語、また多くの現代モンゴル諸語においても複数を表す接辞として -d が認められている (Poppe 1955: 178–180, Janhunen 2003a: 12–13)。契丹語の -d もそれらと同源と考えてよいだろう。モンゴル祖語においては、複数であらわす接尾辞は音韻的条件によって選択され、-d は子音語幹に接続母音 U に後続して用いられたと考えられている (Janhunen 2003a: 12)。しかし、契丹語においては -d は語幹末の母音・子音に関係なく使用されている。

### 3.2. -s

-s は複数を表す接尾辞として多くの語に用いられる。𐰽 <Is>, 𐰺 <os>, 𐰻 <us> などの原字によって表記される。愛新覚羅 (2004a: 138–145), 呉 (2007: 96–107), Kane (2009: 141–142) などの先行研究においてもこれらの原字は複数を表す接辞の表記に用いられると考えられている<sup>20</sup>。

(11) に示すように語幹末が母音の場合は直接接尾辞が付加されるが、語幹末が子音である場合には、母音 I が挿入される。

(11)

𐰽 𐰽 <sair-Is> \*sair-I-s ← 𐰽 <sair> \*sair 「月」  
 儿 奕 𐰽 <lg-ur-Is> \*gur-I-s ← 儿 奕 <lg-ur> \*gur 「国」  
 𐰺 儿 𐰽 <i-ir-Is> \*i:r-I-s ← 𐰺 儿 <i-ir> \*i:r 「名前」  
 𐰻 𐰺 <po-os> \*po-s ← 𐰻 <po> \*po 「時」

モンゴル祖語や中期モンゴル語、また多くの現代モンゴル諸語においても複数

<sup>20</sup> 愛新覚羅 (2004a: 138–145) は、原字の音価をそれぞれ 𐰽 s/sə, 𐰺 dʒi/tʃi, 𐰻 tu とし、複数を表す接辞 -s, -dʒi~dʒi, -t の表記に用いられていると言う。呉 (2007: 96–107) はそれぞれ 𐰽 os, 𐰺 tʃi, 𐰻 su の音価を与えている。Kane (2009) による転写はそれぞれ、𐰽 <s>, 𐰺 <dʒ>, 𐰻 <kä> である。一方、より最近の吉本 (2012) 等の先行研究ではこれらの原字はいずれも s を含む音価であることが判明している。

表す接尾辞として *-s* が存在する (Poppe 1955: 117–118, Janhunen 2003a: 12–13)。契丹語における複数を表す *-s* もそれらと同源と考えてよいだろう。モンゴル祖語においては、*-s* は母音語幹にのみ接続するが、契丹語においては語幹末音が子音であるか母音であるかに関係なく使用されている。

### 3.3. *-ŋer*

*-ŋer* は人称代名詞や親族名詞に用いられる。多くの場合伏𐰽 <*ŋ-er*>, 伏𐰽<sup>21</sup> <*ŋ-er*> によって表記される。愛新覚羅 (2004a: 143–144), 呉 (2007: 111–121), Kane (2009: 142) などの先行研究においてもこれらの字形は複数を表す接辞の表記に用いられていると考えられている<sup>22</sup>。(12) に例を示す。

(12)

尔伏𐰽 <[ʔ]-ŋ-er> *ʔ-ŋer	←	尔 <[ʔ]> *ʔ	「姉」
伏𐰽伏𐰽 <ŋ-εu-ŋ-er> *ŋεu-ŋer	←	伏𐰽 <ŋ-εu> *ŋεu	「兄弟姉妹」
为伏𐰽 <deu-ŋ-er> *deu-ŋer	←	为 <deu> *deu	「弟」
力𐰽出𐰽 <na-a'-aŋ-er> *na'a-ŋer	←	力𐰽 <na-a'> *na'a	「舅」

愛新覚羅 (2004a: 143–144) や Wu & Janhunen (2010: 51) の指摘するように、これはモンゴル諸語に見られる複数を表す *-nAr* と同源と考えるべきであろう。

### 3.4. *-ŋ*

*-ŋ* は比較的少数の語に用いられる。多くの場合伏 <*ŋ*> によって表記される。語幹末が子音 *ŋ*, *g*, *q*, ' 以外の場合には *ɪ* が挿入され、語幹末が子音 *ŋ*, *g*, *q*, ' の場合には、その子音に先行する母音が接尾辞の前に挿入される。(13) に例を示す。

(13)

𐰽列出 <ib-aq-aŋ> *baq-a-ŋ	←	𐰽力 <ib-aq> *baq	「子」
𐰽化伏 <u-ud-ŋ> *u:d-ɪ-ŋ	←	𐰽化 <u-ud> *u:d	「上」
𐰽𐰽伏 <x-edʒ-ŋ> *xedʒ-ɪ-ŋ	←	𐰽𐰽 <x-edʒ> *xedʒ	「方・境」
𐰽伏 <ŋer-ŋ> *ŋer-ɪ-ŋ	←	𐰽 <ŋer> *ŋer	「日」
一𐰽伏 <[ʔ]-ɪd-ŋ> *[ʔ]d-ɪ-ŋ	←	一𐰽 <[ʔ]-ɪd> *[ʔ]d	「北」

### 3.5. *-dʒ*

*-dʒ* は限られた少数の名詞類に用いられる。𐰽 <*idʒ*>, 𐰽 <*edʒ*>, 𐰽 <*udʒ*> などの原字によって表記される。語幹末音が *-r* の語に用いられるようであり、語幹末音と交替する。(14) に例を示す。

<sup>21</sup> 𐰽 の推定音価に関しては愛新覚羅・吉本 (2012: 41–42) を参考にした。

<sup>22</sup> 接辞の形式に関しては、愛新覚羅 (2004a: 143) は *nur* 及び *nin*, 呉 (2007: 121) は *noɪ* ~ *noɪr* とする。Kane (2009) による転写は <*n-er*> および <*n-un*> である。

(14)

令丙亥 <ed-iu-idʒ> *diu-dʒ	←	令丙刃 <ed-iu-ur> *diur	「徳」
公刃狗 <en-ug-udʒ> *nugu-dʒ	←	公刃亥 <en-ug-ur> *nugur	「友」
曲亥 <ge-edʒ> *ge-dʒ	←	曲亥 <ge-er> *ger	「帳・家」
丙刃 <tʃau-udʒ> *tʃau-dʒ	←	丙亥 <tʃau-ur> *tʃaur	「戦」
cf. 凡亥全 <lg-ur-is> *gur-i-s	←	凡亥 <lg-ur> *gur	「国」

先行研究ではこれらに関しては一部の例に対して複数性が指摘されるに留まっている（愛新覚羅 2004a 140, 呉 2007: 105, 愛新覚羅・吉本 2011: 132-133）。この複数接尾辞が接続する名詞類は、格を表す接尾辞の接続においても変則的な例がみられる<sup>23</sup>。

### 3.6. -l

先行研究においては -l も複数をあらわす接尾辞とみなされてきたが<sup>24</sup>, これまでに見出すことができた例は、伏𠂔亥 <ɲ-oʼ-ul> \*ɲoʼu-l ← 伏𠂔亥 <ɲ-oʼ-ur> \*ɲoʼur「部」のみである。伏𠂔亥は、「二」以上をあらわす数詞と共起する例を多数見出すことができることから複数性を持つと考えるのが合理的であるが、データが極めて限られているため今後もさらなる検討が必要である。

## 4. 複数接辞の分布

契丹語の複数接辞の分布に関しては、これまで組織的に分析されたことはない。本節では、前節で示したそれぞれの接尾辞がそれぞれどのような語に接続するか明らかにし、接尾辞使用の背景にみられる原則について考察を加えたい。

おおよその意味が特定されている語<sup>25</sup>に関して、複数接尾辞としていずれが用いられるかまとめた。結果を以下の表に示す<sup>26</sup>。

<sup>23</sup> 一般的に名詞類の位格は接尾辞 -nd によって示される。しかし、複数接尾辞 -dʒ が接続する語に関しては、以下の例のように語末の -r が脱落し接尾辞 -d が付加される。

曲令 <ge-ed> \*ge-d 「帳・家に (Loc)」← 曲亥 <ge-er> \*ger「帳・家」  
cf. 凡亥全 <lg-ur-ind> \*gur-i-nd「国に (Loc)」← 凡亥 <lg-ur> \*gur「国」

<sup>24</sup> 愛新覚羅 (2004a: 139-140), 呉 (2007: 111) など。

<sup>25</sup> これらの一部には文脈からの推測によって意味が特定されたものもあり、表中の語には原義を適切に表していないものが含まれている可能性も否定できない。

<sup>26</sup> 表中では原字の推定音価の表記を省略する。

表

-jer	又雨 *min 「私 (1人称)」、尔 *[*] 「姉」、尙 *deu 「弟」、伏考 *jɛu 「兄弟姉妹」、才 *ja 「兄」、火火 *xy 「妹」、力虫 *na'a 「舅」
-d	芬 *e 「これ」口 *te 「あれ・それ」、牛 *ai 「男・父」、丙 *me 「女・母」、尿及 *[*]o 「婿」、炎及 *uru 「嫁」、虫 *qa 「皇帝」、又力 夫 *jal 「郎君」、穴 *nai 「官」、羽化欠 *d3airoq 「宰相」、仕及 羽 *[*]ud3 「聖」、又化 *mir 「馬」、丑余 *qOrU 「都部署・統」、羽力 *[*]a 「国境」、米及 *ordU 「行宮」、尙九 *[*]g 「字」、非 *po 「時・度・回数」、崇 *qudUq 「福」、月余 *[*]U 「銘」、乃 *mur 「河」、山 *[*] 「黄室夷 <sup>27)</sup> 」
(借用語)	九火 *guŋ 「公」、虫考 *xɛn 「県」、九丙火 *giuŋ 「宮」、曲公 九虫 *gen gau 「官誥」、化 *ji 「師」、化 今 辞 *ji siaŋ 「使相」、火用 *xiŋ 「京」、王 *di 「帝」、世 *si 「司」、杰 *oŋ 「王」
(語末音 -n と交替)	化 九 羽 *irgɪn 「夷离董 (称号)」、王 虫 雨 *di'in 「惕隱 (称号)」
-s	承 *[*] 「山」、艾 *sair 「月 (時間の単位)」、九虫 *gur 「国」、虫虫 *pur 「種」、考 *dor 「礼」、公 不 *non 「世代」、金 *em 「地方・州」、非 *po 「時・季節」、牛 *ai 「年」、火化 *i:r 「名前・称号」、火 *ui 「事」、火 虫 *xiɪ 「言葉」、突 *[*] 「契丹」、表考 火 *d3ɛuq 「漢兒 <sup>28)</sup> 」
-ŋ	羽力 *baq 「子」、一 余 *[*]d 「北」、大化 *umud 「東」、羽余 *ud3ɪd 「内」、虫 火 化 *pu'ud 「外」、羽余 *d3ad 「外」、火 *jer 「日」、雨 先 *ɕa[*] 「先」、及 化 *u:d 「上」、火 虫 *xed3 「方・境」、求 *[*] 「久・永遠」、查 余 *uŋuq 「幼い」
-d3 (語末音 r と交替)	丙 火 *mer 「道・方法」、公 虫 虫 *nugur 「友 <sup>29)</sup> 」、曲 火 *ger 「家・帳」、今 丙 羽 *diur 「徳」、丙 虫 *ɕaur 「軍」
-l (語末音 r と交替)	伏 井 虫 *jo'ur 「部・路」

これらの接尾辞のうち -l, -d3 に関しては収集することができた用例が少なく、現段階では十分に検討することは困難であるため、本稿では他の接尾辞を中心に検討する。

Janhunen (2003a: 12-13) によると、モンゴル祖語においては、基本的な複数を表す接辞として -s, -d が存在していた。これらは、音韻的な条件によって相補分布を成し、母音語幹には -s が用いられ、子音語幹には接続母音 U と共に -d が用いられた。また、-d は n, l, r で終わる語幹では接続母音は現れずそれらの子音と置き換えられた。これらに加えて、より限られた語に用いられる -n や、基本的な複数を表す接辞の組み合わせによって二次的に生じた -dU-d, -sU-d, 人間や神を指示す

<sup>27)</sup> 山の原義は「黄色 .m」であるが、この例では「黄室夷」と呼ばれた民族を指すために用いられている。

<sup>28)</sup> 漢人 (漢族) に対する呼称。

<sup>29)</sup> 愛新覺羅・吉本 (2011: 132-133) による。

る語にのみ用いられる接辞として -nAr, -nA-d, -narU-d が存在していたとされる。

契丹語における複数を表す接辞の分布をみてみると、-ner は、専ら親族名詞及び人称代名詞に用いられている。そのほかの固有名詞を含む人物名詞に用いられた例を確認することはできなかった。

また、モンゴル祖語と同様に複数性をあらわす接尾辞として -s 及び -d がともに存在しているが、共に語幹末音に関係なく用いられていることから、契丹語ではこれらの接辞の使用は音韻的な条件によるものとは考えられない。

-d はこれらの接尾辞のうち最も広く使用され、接続する名詞も多い。中国語からの借用語については基本的に -d が用いられ、他の接尾辞が用いられた例を確認することはできなかった。この接尾辞は生産性が高く、生物名詞・無生物名詞のいずれにも用いられている。その一方、-s は生物名詞に用いられた例はなく、専ら無生物名詞に用いられている。-n は **𐰺𐰣** \*baq「子」を除き無生物名詞に用いられており、多くが時間的・空間的位置を示す語に接続する。**𐰺𐰣** \*baq「子」は、モンゴル文語の「小さい」を意味する形容詞 bay-a と音形式が近似している。契丹語の **𐰺𐰣** \*baq も本来は形容詞的な語であり、名詞的に用いられた際には「子」と言う意味をあらわしていたとするのであれば、-n は空間・時間・様態などをあらわす形容詞・副詞的語彙に接続して複数名詞を派生する接尾辞と考えることができよう。

以上より、契丹語の複数接尾辞の分布には生物 / 無生物の対立など語の意味が大きく関係していることがわかる。そのことを明確に示す興味深い例として、契丹語の **𐰺** <ai> \*ai がある。**𐰺** \*ai は「年」あるいは「男・父」の複数の意味を持つ語であるが、「年」の意味で使用される場合には複数を表す接尾辞として -s が用いられ **𐰺𐰣** \*ai-s となり、「男・父」の意味で使用される場合には複数を表す接尾辞として -d が用いられ、**𐰺𐰣** \*ai-d となる（愛新覚羅 2004a: 142）。

また、-s と -d はともに無生物名詞に使用されが、無生物名詞に対する使用においても、接尾辞の選択にはその語の意味が関与していると考えられる。このことを示すものとして、**𐰺** <po> \*po における接尾辞の使用がある。この語は「時・季節・回数」など複数の意味を持つが、(15) に示すように、「春夏秋冬」すなわち「四時」を意味する場合には (15a) のように -s が用いられ、「時・度・回数」を意味する場合には (15b) のように -d が用いられる。

(15)

- a. **𐰺𐰣** <dur po-os> \*dur po-s  
四.F 季節-PL  
「四時」
- b. **𐰺𐰣** <dur po-od> \*dur po-d  
六.F 回-PL  
「六回」

Corbett (2000) は、Silverstein (1976) による名詞句階層に基づく有生性の階

層 (animacy hierarchy) <sup>30</sup> と複数性との関連について論じている。Corbett (2000: 75-78) によると、ユト・アステカ語族では有生/無生の別によって用いられる複数を表す接辞が異なるなど、有生性の階層における位置と用いられる複数接辞に相関が見られる言語が存在するという。また、山越 (2003) は、現代モンゴル語にみられる複数接尾辞について論じており、複数接尾辞の分布が有生性の階層と関連がみられることを指摘している。契丹語の複数接尾辞も同様に有生性の階層の観点から捉えることができる。すなわち、-*ner* は階層の上位の人称代名詞及び親族名詞に、-*d* は -*ner* に比べて下位の生物名詞・無生物名詞に用いられ、-*s*、-*n* は更に下位の高い抽象性の高い無生物名詞類に用いられるといえる。契丹語の複数接尾辞の分布は、有生性の階層上にはおおよそ (16) のようにあらわすことができる。

(16)

1, 2, 3人称—親族名詞—人間名詞—動物名詞—無生物名詞(物質・抽象)

- <i>ner</i>	*****	
- <i>d</i>	*****	
- <i>s</i>		*****
- <i>n</i>		*****

契丹文字の解釈が完全になされていない現段階において詳細に検討することは困難であるが、これらの接尾辞の分布は契丹語の品詞の区別や契丹語に存在した名詞クラスを反映したものである可能性もある。今回収集したデータからその一端についても考察を加えてみたい。

上述したように -*n* が接続する語には、空間・時間・様態など意味的に形容詞・副詞と考えられる語彙に接続しており品詞と接尾辞の選択に関連性を見出しうる。また、接尾辞には語末子音と交替を示すものが含まれている。たとえば、(10) に示した **𐰽𐰺𐰍** \**irgIn* 「夷离董」, **𐰽𐰺𐰏** \**di'in* 「惕隱」は、語末子音 *n* と交替し複数接尾辞 -*d* が接続することによって、それぞれ **𐰽𐰺𐰍𐰏** <*ir-Ig-Id*> \**irgI-d*, **𐰽𐰺𐰏𐰏** <*ti'i-Id*> \**ti'i-d* となる。これらの語においては (17) のように格を表す接尾辞が接続する場合においても、語末の *n* と交替する。これらの事実、これらの語にみられる *n* が本来何らかの接尾辞であった可能性を示唆している。

(17)

<b>𐰽𐰺𐰍</b>	< <i>ir-Ig-In</i> > * <i>irgI-n</i>	←	<b>𐰽𐰺𐰍</b>	* <i>irgIn</i>	「夷离董」
	夷离董-GEN				
	「夷离董の」				
cf. <b>𐰽𐰺𐰏</b>	< <i>en-on-In</i> > * <i>non-I-n</i>	←	<b>𐰽𐰺𐰏</b>	* <i>non</i>	「世代」
	世代-E-GEN				
	「世代の」				

<sup>30</sup> 1, 2, 3 人稱 — 固有名詞・親族名詞—人間名詞—動物名詞—無生物名詞 (物質・抽象)

調査の結果、接尾辞との接続において (17) と同様のふるまいを示す語として、(18) に挙げた語を確認することができた。

(18)

𐰽𐰺𐰍 *di'i-d 「楊隱 (PL)」	← 𐰽𐰺𐰎 *di'in 「楊隱」
𐰽𐰺𐰍 *irgi-d 「夷离董 (PL)」	← 𐰽𐰺𐰎 *irgin 「夷离董」
𐰽𐰺𐰎 *saju-nd 「詳穩 (Loc)」	← 𐰽𐰺𐰎 *sajuṅ 「詳穩」
	< Ch. EM sian kuṅ <sup>31</sup>
𐰽𐰺𐰎 *d3aju-nd 「敵穩 (Loc)」	← 𐰽𐰺𐰎 *d3ajuṅ 「敵穩」
cf. 𐰽𐰺𐰎 𐰽𐰺𐰎 *tsiaṅ gyn-i-nd 「將軍に (Loc)」	← 𐰽𐰺𐰎 𐰽𐰺𐰎 *tsiaṅ gyn 「將軍」

これらの語はいずれも契丹で使用されてきた称号であり、意味的に共通性を持つ語のグループといえる。したがって、語末の *n* は名詞クラスを示す接尾辞であったとも解釈できよう<sup>32</sup>。-d3 の接続する語に関しては現在のところ、共通する意味的あるいは形態的な性質を見出すことはできていないが、(18) の語のグループが共有する *n* のように、-r がある種の名詞クラスを示す接尾辞である可能性も今後検討せねばならないであろう。

## 5. まとめ

本稿では、契丹語の名詞類に接続する複数をあらわす接尾辞について検討した。そして、名詞類の複数をあらわす接尾辞として -nɛr, -d, -s, -d3, -n, -l を認めた。さらに、契丹語の複数接尾辞の分布を分析することにより、接尾辞の分布には接続する語の持つ意味と大きく関係していることが判明した。さらに、その分布は有生性の階層の観点から捉えうるものであることを示した。これらの事実はこれまで指摘されたことはなく、契丹語の名詞類の特徴を示す重要なデータといえる。接尾辞分布の背景にある可能性のある契丹語の品詞や名詞クラスに関する問題について今後詳細に検討し、記述をさらに発展させる必要があるだろう。

## 略号一覧

M 男性, F 女性, E 挿入音, PL 複数, GEN 属格, LOC 位格, Ch. 中国語, EM 中国語の近世音, Ma. 満洲語, MM 中期モンゴル語, WM モンゴル文語, <> 契丹小字を構成する原字の推定音価, [ʔ] 音価・語形不明, . 音節境界, - 原字境界, \* 推定音素表記

<sup>31</sup> 詳穩の語源は中国語の「將軍」であるとの見解があるが、愛新覚羅 (2004b: 133) は、契丹文墓誌の記述において 𐰽𐰺𐰎 「詳穩」である人物が、他の資料では 𐰽𐰺𐰎 𐰽𐰺𐰎 \*sian guṅ 「相公」とも記されていることに注目し、「詳穩」の語源は中国語の「相公」であると指摘している。

<sup>32</sup> 格や数をあらわす接尾辞が接続した例を確認することはできていないが、契丹の官名である 𐰽𐰺𐰎 \*liṅun 「令穩」← Ch. 「令公」EM liṅ kuṅ も、語末音は *n* であり、(18) にみられる語と同様のふるまいを示す可能性がある。

## 参 照 文 献

- 愛新覺羅烏拉熙春 (2004a) 『契丹語言文字研究』京都：東亜歴史文化研究会。  
 愛新覺羅烏拉熙春 (2004b) 『遼金史與契丹女真文』京都：東亜歴史文化研究会。  
 愛新覺羅烏拉熙春・吉本道雅 (2011) 『韓半島から眺めた契丹・女真』京都：京都大学学術出版会。  
 Corbett, Greville G. (2000) *Number*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 高路加 (1988) 「契丹小字複数符号探索」『内蒙古大学学报』第2期：44-51。  
 Janhunen, Juha (2003a) Proto-Mongolic. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 1-29. London and New York: Routledge.  
 Janhunen, Juha (2003b) Para-Mongolic. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 391-402. London and New York: Routledge.  
 Kane, Daniel (2009) *The Kitan language and script*. Leiden-Boston: Brill.  
 Kullmann, Rita and Dandii-Yadam Tserenpil (2008) *Mongolian grammar*, Forth revised edition. Ulaanbaatar: ADMON.  
 栗林均 (編) (2009) 『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』仙台：東北大学東北アジア研究センター。  
 李珍華・周長楫 (編撰) (1999) 『漢字古今音表 (修訂本)』北京：中華書局。  
 Ligeti, Louis (1970) Le tabghatch, un dialecte de la langue sien-pi. In: Louis Ligeti (ed.) *Mongolian studies*, 265-308. Amsterdam: B. R. Grüner.  
 森安孝夫 (2007) 『シルクロードと唐帝国』, 興亡の世界史 第05巻。東京：講談社。  
 大竹昌巳 (2013) 「契丹語的元音長度——兼論契丹小字的拼写規則」『華西語文學刊』8: 86-96。  
 Poppe, Nicholas (1955) *Introduction to Mongolian comparative studies*. Mémoires de la société finno-ougrienne 110. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura.  
 清格爾泰 (1997) 「契丹語數詞及契丹小字拼讀法」『内蒙古大学学报』第4期：1-9。  
 清格爾泰 (2010) 『清格爾泰文集 第5巻 契丹文字研究』赤峰：内蒙古科學技術出版社。  
 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝林・邢複礼 (1985) 『契丹小字研究』北京：中国社会科学出版社。  
 Rybatzki, Volker (2003) Middle Mongol. In: Juha Janhunen (ed.) *The Mongolic languages*, 57-82. London and New York: Routledge.  
 Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.  
 田村実造 (訳注) (1971) 「室韋・契丹・奚伝」内田吟風・田村実造他 訳注『騎馬民族史1 正史北狄伝』287-340。東京：平凡社。  
 呉英喆 (2007) 『契丹語靜詞語法範疇研究』呼和浩特：内蒙古大学出版社。  
 Wu, Yingzhe and Juha Janhunen (2010) *New materials on the Khitans small script*. Folkestone: Global Oriental.  
 山越康裕 (2003) 「モンゴル語の複数接尾辞と名詞句階層」『言語研究』124: 131-153。  
 吉本智慧子 (2012) 「契丹小字の推定音価及び相関問題」『立命館文学』627: 157-129。  
 Зайцев, В. П. (2011) Рукописная книга большого киданьского письма из коллекции Института восточных рукописей РАН, *Письменные памятники Востока*, No. 2 (15): 130-150.

執筆者連絡先：

[受領日 2015年1月7日]

606-8501 京都市左京区吉田本町

最終原稿受理日 2016年1月31日]

京都大学大学院文学研究科 (白眉センター)

e-mail: yasanori.takeuchi@gmail.com



**Abstract****Plural Suffixes in Khitan**

YASUNORI TAKEUCHI

*The Hakubi Center for Advanced Research, Kyoto University*

The purpose of the research is to identify the conditions under which plural suffixes are used in nouns in the Khitan language. According to our investigation, the distribution of such plural suffixes as  $-\eta\epsilon r$ ,  $-d$ ,  $-s$ ,  $-d\zeta$ ,  $-\eta$ , and  $-l$  is closely related to the meaning of the words to which they are attached. This relationship can be captured by an animacy hierarchy. Specifically,  $-\eta\epsilon r$  is used with personal pronouns and kinship terms of high animacy, and  $-d$  is used with both animate and inanimate nouns of lower animacy, while  $-s$  and  $-\eta$  are used with highly abstract inanimate nouns and adjectives of even lower animacy. We also demonstrate a possible connection between the selection of these suffixes and parts of speech/noun classes in the Khitan language.